
名もなき恋心

御津 貴広

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名もなき恋心

【Nコード】

N3773Q

【作者名】

御津 貴広

【あらすじ】

いまや世界的に有名になったソーシャルなんちゃらサービス「ツイッター」

そこで「僕」は「彼女」に惹かれ、異常だとは思いつつもだんだんと自分の恋心を確信していくのだった。

はじまり（視点：僕）

あの子がまたこっそりとつぶやいている。

僕は内容を読むと、小気味良い音を自室に響かせてリプライを書き込んでいった。

あれは、いつのころだったか。時期は覚えていないが初めてあの子に声をかけた内容は覚えている。

「絵、かわいいですね！フォローさせて頂きました！」

「ありがとうございます！！！！！」

フォロワーさんがこの子の書いた絵を非公式RTしてて、それを見た僕が気に入りフォローしたのだ。

その子は、とにかく勢いのある子だった。

どうやら、ツイートを読む限り女の子らしい。

彼女は自由奔放で、気ままで、自己を表現する才能に秀でていてと僕は感じた。

だから、僕はそんな彼女にだんだんと惹かれていったのだった。

ケータイからツイッターを覗くと、つい彼女の姿を探してしまう自分があった。

大学受験を控えているのに、こういう状況はマズい。

けど、僕自身趣味で絵を描いており、彼女との会話が弾むのは必至だった。

彼女とは色々話した。

好きな絵師やキャラクター。絵を描く時に使用するソフトウェアから技巧。

最近の趣味や、音楽について。インターネットで流行ってるスラングについて語ったり、多岐に渡った。

僕は彼女にのめりこむようになり、彼女のツイートに対して過度の
リプライを送るようになっていた。
それが原因だったのか、それとも僕に非があったのか、ある日彼女
にブロックされてしまったのだ。

それにすぐ気がついた僕は、彼女にメールを送った。
メアドを交換する仲にまでなっていたのに、突然のブロック……。
僕は自分の中からわき上がる様々な感情を抑え、内容は短く、
「また絡んでくれる気になったらフォローしてね」
とだけ送った。もちろん返事はなかった。

季節は冬。

勉強もラストスパートをかけないといけなかったし、ちょうど良か
ったのかもしれない。

僕は、その日からツイッターを覗く時間を減らし、勉強に集中した。

年が明け、新年。

正月休みを終え、学校が始まってしばらくしてからとあるフォロー
申請の通知メールがきた。

最近フォロワーが増えていた僕はアカウント名だけ確認して、あと
からプロフィールを見てフォローするか否かを判断していたのだが、
アカウント名を確認した時点で僕はケータイを開いていた。
来たのだ、彼女からのフォローが。

すぐさまリフォローし、リプライを打ち込んだ。

しかし、書いた内容を一度読みかえし、削除。しばし考え、こう送
った。

「よお」

これで良い。彼女と僕の間にはこれで十分のはず。

しばらくして彼女から返事があった。

「本当にごめんなさい><あの時はその時の気分になんか任せて勢いでやっちゃって……。勢いでブロックとかやったらダメだなんて思うようになったんです><」

彼女に、なにかあったのだろうか？

僕は、ブロックされている間に彼女になんかあったか気になったが詮索はしなかった。過去ログを読むようなこともなかった。

それは、なんかやったら駄目な気がしたのだ。

それから、僕は前回のようなりプライは送らないようにした。

ひっそりと彼女のツイートを眺め、時折気になる話題にだけ絞ってリプライを送る。そういった勉強の合間にツイッターをやるという日々がしばらく続いたが、ある時彼女が自身の鍵アカで僕をフォローしてきたのだった。

「お？リフォローなう」

「ありがとうございます><」

それから、彼女がひっそりとつぶやく、心の内側を見ていくことができるようになったのだ。

はじまり（視点：私）

私はまたひっそりと鍵垢でつぶやく。構って欲しいだけなのは自覚してる。誰でもいいから、私に私がこの世界に居るってことを感じさせて。

あれは、いつだったかな。もう忘れちゃった。だけど、最初にあの人が私にかけてくれた言葉は覚えてる。

「絵、かわいいですね！フォロワーさせて頂きました！」
私なんかの絵を、褒めてくれたんだ。

フォロワーさんじゃないけど、返事を書き込む。

「ありがとうございます！！！！！」

少し間が空いて、

「フォロワーさせていただきますね！」

との返事が。

リフォロし、私はフォロワーさんが増えた喜びを感じて今日もまたネットに深く沈んでゆくのだった。

昼間は学校行ってるから、ツイッターは覗けない。

私ที่บ้านに帰ってまずやることはパソコンを起動させることだ。

立ち上がるのを待っている間に手洗い、うがい、着替えなどを済ますのが常だ。

一通り終えてパソコンの前に戻ると、デスクトップ画面で砂時計が動いているのが確認できた。

「ポンコツ」

ぼそりと声に出してつぶやくと、マウスを手にとってデスクトップ上のアイコンをクリックしてネットにつなぐ。

「パソコン買い換えてくれないかなー、絵描くのにフリーズされたりして何度も泣きをみてるし」

愚痴をこぼしながら開くのはツイッターだ。

ツイッターでも愚痴をこぼしてばかりだな、と自嘲気味に思うが同時にこれがツイッターってもんかな？とも思う。ただ、虚空に独り言を放つ感じ。

今日も学校での出来事や、自分の画力のなさについて思いついたまま打ちこんでいく。

「あー、まじだりい」

いくつかりプライが飛んできているが、返す気力が起きない。

気分屋なのは性分か。

「ま、いいよね」

そうだ、絵描くか。

最近、あるフォロワーさんから大量にリプライが送られてくる。

それだけ私がつぶやいてるってことでもあるんだけど。

そのフォロワーさんとの会話は楽しいし、その人の事は好きだ。

私のお気に入りのフォロワーさんが最近姿を見せないせいもある

で、だんだんと心惹かれてる自分が居る。だけど、なんか浮気し

てるみたいな気分になって嫌。

私の中に入ってこようとしないで欲しい。まだ、私はあなたを受

け入れられないの。

ほんと、些細なことでもツツコミを入れてきて、だんだんウザク
なってきた。

無視することすらめんどくさい。

ブロックしよーかなあー・・・。

あー、また来た。うぎ。まじなんだこいつ。

うぎああああああああああああああああああああああああ

ああ

いぢれ。

年が明け、新年。

私はあの人をブロックしたことを後悔していた。
リフォローしようにも、向こうはIDを変えているみたいで見つからない。

弱った。

「あ・・・」

あの人だ。

あの子のツイートが公式RTされて回ってきた。
内容は至ってくだらない物だったが、みつけた。

「ん」

フォローを飛ばす。

うん、これでよし。

声かけるのも怖いし、見つけられるまで放置しとこ。

1, 2時間後再びツイッターを覗くとリプライが来ていた。

「よお」

短く、それだけ。

ん、そうだよな。

あの子は私を詰ったりしないもの。

私は、やっぱりあの子が気になる。

異性に対する好きとかじゃなくて、人として好き。こつやっつて、
気にいった人に依存していくんだよな、私。

だから、あなたの愚痴とか見てたいし、私の思ってること知って
欲しい。だから、

「お？リフォローなう」

鍵垢でフォローした。受け入れて、私を。私もあなたを受け入れるから。

「ありがとうございます><」

鍵垢でリプライを返した。うん、もっと知って欲しい。見て欲しい。私に、私がこの世界に居るって確認させて。利用してるだけかもしれない、けどこの気持ちは本物。

でも、あなただけじゃないの。ごめんなさい。

現実その1（視点：僕）

冬。一月も後半に差し掛かりますます寒さが厳しくなってきた。特に、浜松市西地区というところは南に海、西に浜名湖、中央に佐鳴湖、東に天竜川という地形でとても風が強い。とにかく、寒いのだ。

そんなどうしようもない外気温を思っただけでも仕方ないのだが、バスから下車したくない気持ちはわかってもらえらるだろう。

湖東高校。これが僕の通う学校だ。文系5クラス、理系3クラスの普通科しかない普通の高校だ。

地元でも特に目立った高校ではないが、入った理由は単純に家から一番近かったという一点に尽きる。それでも、バスを利用せざるを得ない距離であるという事実が田舎に住んでいることを否応なしに実感させられるのだが。

「・・・さむ」

ボソリと声に出し、校門をくぐる。

昇降口に向かいながらコートのポケットをまさぐり、iPhoneを取り出す。

「特にない、か」

最新のツイートを読み込むが、特に目立ったものはなく、元のポケットにiPhoneをしまっ。完全に依存してるな、と自分でも思うがこればかりはどうしようもない。

だいたい、彼女が現れるのは夕方以降だ。しかもだいたいパソコンから。深夜はケータイが多い。と、ここまで思い返して自分が嫌になる。

「ストーリーかよ俺は・・・」

最近、フォロワーの一人である『のぞみん』のことが気になって仕方ないのだ。ツイッターを開くとツイートを探してしまうし、いつも居る時間にいないと不安になる。

「ネットで恋とか、笑えねー」

思ったことをそのまま自嘲気味に吐き出して、上履きに履き替え教室へ向かう。

途中、学友たちに挨拶を交わしながら行く先は3年3組、これが僕のクラスだ。

僕の席は一番左の列、前から3番目。

鵜飼 実、これが僕の名だ。

名簿順に並んでいるため、この位置に席がある。ちなみに、前はクラス1イケメンの井上と、更にその前は爽やか系スポーツマンの赤坂。

僕は図書館に住んでそうな根暗男子といったところ。近視でメガネをかけているが、黒縁メガネしか似合わない、かなーり地味な容姿。こうやって近くにイケメンが二人も居ると世の中不公平だと思う。

かばんから読みかけの文庫本を取り出し、続きを読み始める。

「自分で均一を保つこと。それが公平、かなあ」

現実その1（視点：私）

私は鈴木 希。可美小学校に通う小学五年生だ。

趣味はネットサーフィンやらツイッターやら。ネットって面白いよね、女ってだけでチャホヤされるんだもん。

「ほんと、男ってしょーもない」

あ、またリプきたし。

「・・・ハイハイ、スルースルー」

私、特に気にならない限りリプしないし。

私の性格自体が問題なのは理解してるけど、それを悟った上でやってるんだし、いいよね。

学校行く時間はツイッターできない。さすがに学校にケータイはもっていけないし。だから、活動時間はだいたい夕方から夜。

なんか愚痴っぽいこと書いたり、適当に絡んでるだけなんだけど、なんともいえない不思議な塊が形成されていく感じがたまらなく好き。

特に、話題の槍玉にあがったり、渦中にいると最高。

学校では普通に暮らしてる。普通の小5の女の子だと思う。周囲には、私がこんなにスレてるのは誰も思わないだろう。

クラスの男子には興味ない。だってガキなんだもん。

くだらない替え歌を大声で歌ったり、品もセンスもないギャグを飛ばしたり、大騒ぎしたり。

ほんとガキ。

「あ、そろそろ学校行く時間だ・・・」

ケータイを充電器ホルダーに放り込み、ランドセルをひったくるように右手に取った。その勢いでそのまま腕に通し右肩に下げるとアパートのドアを開ける。

「・・・いってきます」

ああ、学校めんどーだなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3773q/>

名もなき恋心

2011年10月8日14時26分発行